

《第 458 回（2018年12月13日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：4人 文書参加：3人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア4階集会室

『レモンの図書室』 ジョー・コットリル／作 杉田 七重／訳 小学館

「レモン」と聞くと、爽やかで瑞々しいイメージが感じられるのではないのでしょうか。しかし今月の課題本『レモンの図書室』が書かれたイギリスでは、「レモン」という言葉には「欠陥品」、「困難の象徴」という意味があるそうです。物語の中では、主人公カリプソの父親が研究しているというレモンの実が、切なく、哀しい象徴として登場します。

10歳の女の子カリプソは、母を病気で亡くし、父親と二人で暮らしています。「人に頼らずに生きることが強いことだ」と父親に教え込まれているカリプソは、仕事に没頭して食事も忘れてしまうような父親の代わりに家事をこなします。一方で父親は、最愛の妻を亡くした悲しみから、心のバランスが崩れたまま戻らなくなっていました。

カリプソの閉じられた世界は、同級生の女の子、メイと出会うことで、どんどん広がっていきます。人と繋がることで得られる強さや、自分の家庭の危うさに気付くことができたカリプソは、メイ一家に見守られつつ、温かい家庭を再び取り戻すため父親と向き合います。苦々しいレモンから、おいしいレモネードを作っていくように。

それでは、読書会参加者の方の感想を、順に紹介します。

●カリプソが前向きに闘っていく姿に好感が持てた。父親の様子も、メイの家族と関わることで変わってきている。「強い心を持つように」と言われ続けてきたカリプソのことを、「そんなの無くて当然」と優しく抱きしめたメイは、親の愛情を受けながら育った子で、色々なことを人と分かち合うことができる子どもだと思う。

●自分は、カリプソの父親の気分で読んだ。二人が支え合いながら生きていくのが理想だけれど、まだ父親自身の心のバランスがとれていないから難しい。そんな中で、親子が他の家族と関わることによって、カウンセリングの必要性に気付けた。カリプソも、同じ「ヤングケアラー」の子どもたちや、同じ読書好きのメイとの関わりで元気になったので、だんだん二人だけでも家庭を保てるようになるのではないかな。

●さくさく読めるが、重い問題。カリプソはメイの家族と触れ合うことで、子どもらしさに出会えた。メイの母親がカリプソに、さりげなく、母が子どもにしてあげられるようなことをしてあげるといふ関わり方が嬉しかった。本来の、帰っていける場所があるということは大事。家庭が再生して、そういう場所が二人で作れるようになってよかった。

●年に一度でも、頑張っている子ども、苦労を背負ってしまっている子どもに、よい子だったと肯定してくれるクリスマスの聖人が実在してくれたらどれほどよいかなと思う。強い人でも、いつでも強くいられるわけではないし、大人が強く、子どもが弱いとは限らない。頑張るカリプソには、現実のプレゼントだけではなく、「サンタさん」のような夢をあげられたらと思う。

●カリプソが父親の作ったレモンの図書室を見て爆発したシーンでは、「我慢しないで！10歳なんだからもっと感情を出してもいいんだよ！」と感じた。でも、言われたまま言葉に打たれるお父さんを見ると、「お父さんだって人間だもん、間違えるよね。カリプソと違う人間だから、価値観だって違うし、色々一生懸命だったんだよ…許してあげようよ」とも思った。大人も子どもも、自分を肯定してくれる存在は必要不可欠で、心も体も包んでくれる安心できる場所が必要なんだと改めて感じた。

●最初に読んだ時は、カリプソに感情移入して、父親に怒ってばかりだった。再読した時は、愛する妻を心の準備をする間もなく病気で亡くした父親の悲しみが伝わってきた。時には、本に逃げることもあってもいい。本の世界に入り込んで現実を忘れる時間が、気持ちを切り替えて頑張る力になればいいと思う。メイ一家の存在も、どれだけカリプソの力になっていることか。人が強くなるためには、人とのつながりが必要。カリプソよかったね、もう少しだよ、と言えるラストが嬉しかった。

次回 1月10日(木) 10:00~11:30 オーテピア4階集会室

□『ギヴァー 記憶を注ぐ者』『ギャザリング・ブルー 青を蒐める者』